

# 「表現運動」の作品概念

本 山 福 美  
津 田 史 枝

## 1. 問題の所在

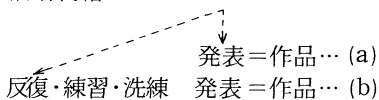
「表現運動」の作品は、リズムカルな動きの展開であると考えていた。従って、そのような展開になるためには、必ず動きのその連続をリズムカルに再現できるように踊り込む必要があり、再現できるようになった時に、初めて子どもは「表現運動」の特性に触れることができ、充実感を持つことができるものと考えていた。ところが、現実の実践では、ここまで活動が到達しないことが多かったため、子どもの活動に低い評価をしがちであった。同時に教師である自分の力不足を嘆き、子どもには難しい活動であるとみなし、次第にこの領域から遠ざかるようになった。

しかし、「表現運動」の作品は、多種多様な身体をもつ子ども一人ひとりが身体を動かし、動きをつくることから出発すると改めて気づくことができるようになった。作品をこのように捉えなおすと、“現場での活動を低く評価し、とても作品とはいえないと考え、作品と思い込んでいたものだけが作品である”という作品概念には問題があり、子どもが作品を実現する姿を再考する必要があるのではないかと考えるに至った。

## 2. 現状分析

「表現運動」の活動現場において、子どもが作品を実現する姿は、次のように整理できる。

- 1) 即興＝作品
- 2) 作品制作活動未終結→発表∴作品
- 3) 作品制作活動終結



## 3. 考察

1)の図式は、発表の場で子どもの即興的な動きが即作品になることを示す。

2)の図式は、作品制作活動が作品の全体像を明確にしない未終結の状態を発表の場に臨み、それが作品となることを示す(従って、点線)。つまり、作品の発表段階では決定されている部分と未決定の部分とを含むということである。この未

決定の部分には、二つの場合が考えられる。一つは、作品の全体構想は出来上がっているが、未決定の部分の動きが制作過程の中で曖昧さを残す場合である。もう一つは、作品の全体構想に対して動きが決定している部分もあるが、制作時間終了時点で白紙の動きの部分を残す場合である。

このような曖昧な動きや、動きの白紙という未決定の部分は、発表の場において即決定される。この決定は、即興的な解決により可能となる。この即興的な解決の姿勢は、「表現運動」の出発点であると同時に本質でもあり、1)の図式で作品と考えられるように、2)の図式においても発表場面では作品となりうる(点線が実線となる)。

作品制作未終結→発表＝作品

3)の図式は、作品制作活動の結果、作品が全体像を明確に決定した上で発表する作品を示す。この明確にした時点での発表の作品が図式(a)であり、図式(b)は、(a)をさらに反復・練習・洗練という活動を経て発表する作品を示す。

この図式(b)の作品が以前の現場実践の中で抱いていた作品概念であり、この作品観が狭義の作品概念を植え付けていたことが分かった。

## 4. 結論

「表現運動」の出発点と本質は、1)の図式で作品を可能にする即興であり、この力は、子どものつくる活動の基盤となる。

発表の場で行われる活動は、全て作品として享受される。従って、低い評価をしていた未決定の部分を残しても、発表の場では即決定し作品となりうる。このことから、教師は、3)の図式(b)を実現することのみが「表現運動」の作品であるという狭義の概念から、解放されることになり、図式1)、実線となった図式2)、図式3)の(a)・(b)がいずれも作品となりうる。

教師がこのような作品概念を持つことは、現れている子どもの活用を寛容に受け入れることを可能にし、子どもの活動の問題点を容易に洞察する力を培うと期待できる。

### (注)

「表現運動」とは、小学校学習指導要領の第3学年以上の表現運動と、第1学年・第2学年の基本的運動の中の模倣の運動の総称。

### (主要文献)

- 1) 尼ヶ崎 彬, 芸術としての身体, 勁草書房, 1988.
- 2) 尼ヶ崎紀久子, 「舞踊における作品概念」, 舞踊学会, 第9号別冊, 1986.
- 3) 松本千代栄(編者), 子どもと教師でひらく表現の世界, 大修館書店, 1985.